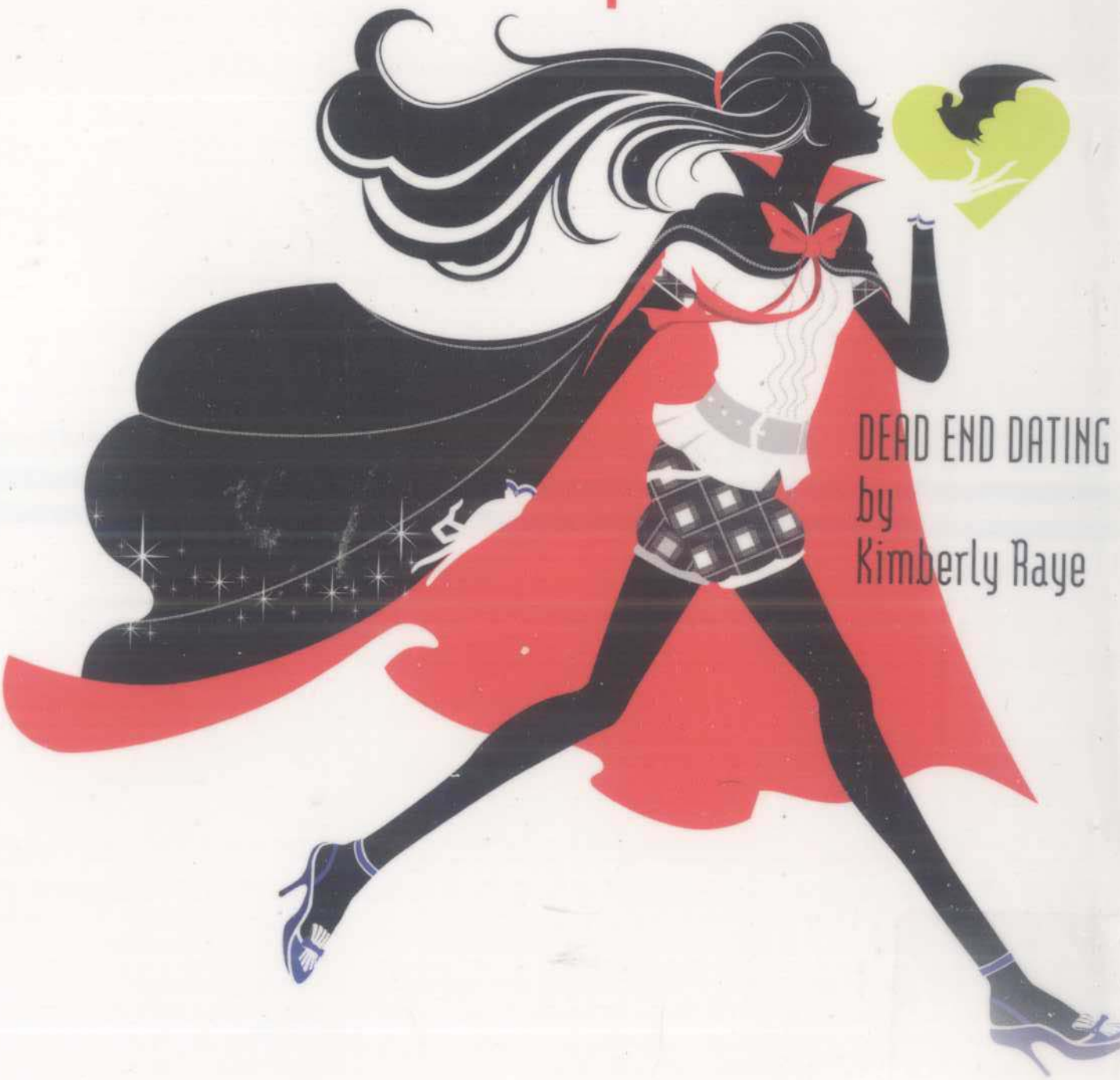
お嬢様はヴァンパイア

恋したっていいじゃない!!

キンバリー・レイ
岩田佳代子＝訳



DEAD END DATING
by
Kimberly Raye

ソフトバンク文庫

お嬢様(じょうさま)はヴァンパイア1　恋(こい)したっていいじゃない!!

2009年6月24日　初版発行

著者　キンバリー・レイ

訳者　岩田佳代子(いわたかよこ)

翻訳協力　株式会社トランネット

発行者　新田光敏

発行所　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107-0052　東京都港区赤坂4-13-13
電話03-5549-1201（営業部）

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

デザイン　モリサキデザイン

フォーマット・デザイン　モリサキデザイン

カヴァーイラスト　シンボロン

本文組版　アーティザンカンパニー株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。
定価は、カバーに記載されております。
本書に関するご質問は、小社エンタテインメント書籍編集部まで書面にてお願いいたします。

© TranNet KK 2009 Printed in Japan　ISBN 978-4-7973-5419-5

江苏工业学院图书馆
藏书章

キンバリー・レイ

お嬢様はヴァンパイア1　恋したっていいじゃない!!

ソフトバンク文庫

DEAD END DATING

by Kimberly Raye

Copyright © 2006 by Kimberly Raye Groff
Japanese translation rights arranged with Ballantine Books,
an imprint of Random House Publishing Group,
a divison of Random House Inc. through Owls Agency Inc.

主要登場人物

リル・マーシェット……パートナー紹介会社〈DED〉社長。
ボーン・ヴァンプ

タイ・ボナー……バウンティ・ハンター。
メイド・ヴァンプ

ニーナ・ランカスター……リルの親友「ニーナ一号」。
ボーン・ヴァンプ

ニーナ・ウェルバートン……リルの親友「ニーナ二号」。
ボーン・ヴァンプ

ウィルソン・ハーヴェイ……リルの見合い相手。ボーン・ヴァンプ

フランシス・ドヴィル……〈DED〉男性会員でフランス名家出身。
ボーン・ヴァンプ

エスター・クラッチ……〈DED〉女性会員。メイド・ヴァンプ

メリッサ・トーマス……〈DED〉女性会員。人間

ジェリー・ドームフェルド……〈DED〉男性会員。人間

イーヴィ・ドルトン……〈DED〉従業員。人間

ジャクリーン・マーシェット……リルの母親。

ヴィオラ・ハミルトン……マーシェト家の隣人。女性の狼人間

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

はじめまして、わたしはリリアナ・アラベラ・グィネヴィア・ドゥ・マーシェット女伯爵（長ったらしい？　でしょ。よくわかっているの）。でも友だちは、リルと呼んでくれる。

本当に両親は、いったい何を考えていたのだろう？　フランスの王族も顔負けの仰々しい名前。古くさくてうんざりする、ビザ申請書の枠内にすら入りきらない長々しい名前。こんな名前がなくても、独身で、仕事もない五百歳の女性ヴァンパイアが生きていくのは大変なのに。この名前のせいで、さらにまたすごい十字架を背負わされるなど、願い下げだ（しまった、わたしとしたことが、十字架などと縁起でもない言葉を）。

生きていくのはどんな女性でも大変だけれど、死んだほうがマシ、ということはない。わたしたち女性ヴァンプは、あいもかわらず母親としての役割を求められ、さらに、バ

ービー人形のイメージまでをも期待される――完璧なプロポーション、完璧なヘアスタイル、完璧なファッション、完璧な牙をいつまでも保つこと。もちろん子どもを産み、しっかり世話をしてきちんと育てること。そして狩りをし、家族に尽くすこと。ストレス以外の何ものでもない。

もっともこれは、ごく普通の、従順な女性ヴァンプにとっては、の話だ。わたしはといえば、この百年、まともなデートをしたこともなければ、ましてや運命の相手もみつかっていないので、少しはすっきりした人生を送れている。いっておくけれど、あくまでも〝すっきりした〟人生で、決して〝寂しい〟人生ではない。本当に、少しも寂しくないのだから。

独身で、セクシーで、流行の先端を行くヴァンプ。ファッションセンスも抜群で、片手で足りるものの、最高に素敵な友だちもいる――文字どおり、とても甘い香りのする友だちが。それに、ものすごくお金はかかるものの、セラピストまでいる。ここまでいえば、寂しくないとわかってもらえるでしょ。

いけない、話をもとに戻さないと。そういうわけで目下わたしは、自立をめざして奮闘中だ。まず最初はアパート探し。独身の娘が両親とひとつ屋根の下で暮らせるのは、ほんの数世紀のあいだだけだから。それ以上いっしょにいたら、神経衰弱になってしまう。それから、次は職探し。本当は、わたしのようなヴァンプなら、どちらも大した問

題ではないはずなのだ。正真正銘のヴァンパイア（もと人間のヴァンプではなく、生まれながらのヴァンプのこと）は上昇志向が強く、ほかのヴァンプに負けまいと頑張るため、ほとんど例外なく、とても裕福だ、それも桁違いに。だから、わたしさえその気になれば、効率よく両親のお金を使って、マンハッタンに手ごろなマンションをみつけ（もちろん、わたしの掃除嫌いを考えれば、住みこみの家政婦つきで。でもそれだと、両親に一生頭が上がらなくなりそうだけれど）、父が営む〈ミッドナイト・モウズ〉のニューヨーク大学支店で働けばいい。

〈ミッドナイト・モウズ〉とは？

まずはコピー機を想像してほしい。それからプリント・サービス。それから、全米に広がる二百以上の支店（身近な大学のそばを探したら、必ずある）。

つまらないこと、このうえない。

何も、コピーやプリントが嫌なわけではない。けれど、夕暮れから夜明けまでカウンターに立っている自分、それも胸ポケットに〈ミッドナイト・モウズ〉と刺しゅうの入ったライム・グリーンのポロシャツを着て、それに合わせたチノパンをはいている自分など、絶対に想像できないだけ。ライム・グリーンはまるで似合わないうえ（奇抜な色は身につけない主義だし、似合わない色だと、どんな色を着ても死んだように見えるから）、チノパンにいたっては……考えただけでぞっとする。家族が営む会社に未来永劫

勤めると思ったとたん、自分で自分に杭を打ちこみたくなる気持ちがわかるはず。

もうお察しだろうけれど、わたしは、大半のヴァンプと違っている。違わないのは、恐らくひとりだけ。父曰く、わたしは大おばのソフィによく似ているらしい。去年テレビショッピングで買った日焼けマシンで、自分を焼いてしまった大おばに。確かに大おばは、世間に広く浸透しているヴァンプのイメージにまるでそぐわない異端児だった。髪はブロンドに染め、マニキュアは淡いピーチカラー、そのうえいつもはいていたのは、派手なプリントの巻きスカート。

でもわたしは、派手なプリントのものなど、死んでも身につけるつもりはない。日焼けマシンに潜りこむつもりもない。〈クリニーク〉から、非の打ちどころのない美しい日焼け色の肌になれる、最高に素敵なブロンザーが出ているのだから。マシンなど断じてごめん！　淡いピーチカラーにも興味なし。ただ、髪はブロンドに染めているし、完全に異端児ではある（生まれたときにとり違えられた娘、ともいう。母が、〈ハッピー・ハンティング・クラブ〉のお仲間のおばさまたちにそう話しているから）。

もちろん、忌まわしいまねもしない。通りをうろついて、無防備な被害者に嚙みつくなど言語道断（相手が最高にハンサムならべつだけれど）。窮屈な棺で寝たりもしない。黒ずくめの男性を見ても、興奮しない（格好云々ではなく、男性はやはりセクシーでなければ）。冷血漢でも無慈悲でも非情な女でもない。わたしがそういう女になるのは、

正真正銘はじめてのボーイフレンドを奪われた相手――ブロンドの髪に青い瞳のあの浮気女コレット・ドゥ・ギリアム王女にたいしてだけ。

わたしが好きなのはピンク。噛みつくなどもう、時代遅れ。血なら、コスモポリタンのチェイサーをそえて、マティーニグラスで飲むほうがずっとオシャレだ。寝るのは、ふかふかのキングサイズベッド。マット・デイモンやブラッド・ピットやトビー・キースのことを思うと、オーガズム・メーターが振り切れる（トビー・キースだけタイプが違うものの、あのカウボーイ・ハットは捨て難い）。知る人ぞ知る、テレビのコマーシャルで泣けるヴァンプでもある。しかも――これはわたしの家族にいわせると、救いようのない大罪らしいけれど――ここだけの話、ロマンチストだ。

完全に、恋に恋している。

恋に関することなら、何もかも大好きだ。見ず知らずのふたりが、はじめて視線をかわす出会いのときから、互いが互いを運命の相手と感じる奇跡のような瞬間まで（素敵でしょ）。そんなわたしのお気に入りの映画は『プリティ・ウーマン』。それから『愛と青春の旅立ち』に『ターミネーター』（映画そのものは感動的ではないけれど、あのラブシーンには本当に心を打たれるもの）。大好きなイベントはバレンタインデーで、左のビキニラインには、ハートのタトゥー入り。そして極めつけ、テレビドラマは、主人公が素敵な恋人といっしょになるハッピーエンドに限る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そういうわけで、もろもろの支払いのために〈モウズ〉で働くのを辞退し、もう少しロマンチックな仕事を探すことにしたのは、当然だった。

ヴァンプも、恋をしなければ。

もちろん、ボーン・ヴァンプは大半がこの考えに文句をいう。一、そもそもヴァンプに恋が必要だとはだれも思わず、ほとんどのヴァンプが凶暴な吸血鬼だし、二、考え方が古く、わたしには遠くおよばないから。けれど、この〝リルの考え〟に反対しているごく普通の若い男性ヴァンプでも、先刻話した現実的な理由（出産や子育て云々）から、永遠の相手（エタニティ・メイト）探しには、依然として必死になっている。そこで、そんなヴァンプたちに出会いの場を提供することにしたのだ、不肖ながらこのわたしが。でも、わたし以上の適任者などいないと思う。

当然お金はもらう。そこはやはり、女性がひとりで食べていかなければならないから（さらにこの女性には、コスメ代も相当かかるから）。そのため出会いの場は、ヴァンプに限らず広く提供していく。そんな夢のように素敵なひらめきから起ち上げた会社が〈最後のデート（Dead End Dating）〉だった。マンハッタンを拠点に、だれにでも分けへだてなく、パートナーを紹介する。オシャレで、常識があって、趣味がいい、それでいて、将来性のないデートにうんざりしている独身者に。さらには、オシャレで、常識があって、趣味がいい、エタニティ・メイトを探している独身のヴァンプにも。

すごくいいアイデアだと思う。もうその一言に尽きる。うちの家系には、天才の血が流れているから（キュリー夫人は知っている？）。とにかく、この素敵な計画を、わたしは早速実行に移した。先週、大好きな〈スターバックス〉（モカラテとメープルスコーンのいい香りがする）の角を曲がってすぐのところに、非の打ちどころのないオフィススペースを借りて、従業員第一号も雇った。イーヴィ・ドルトン。イーヴィは正真正銘の人間だけれど、吸いつけられたのだ（しゃれではなく）、面接のときの最高に素敵なコーディネイトに――〈DKNY〉のショートジャケットに、〈グッチ〉のブーツカット・コーデュロイパンツ、〈ケネスコール〉のブーツ、そして何より大事だったのが――ものすごくオシャレなラインストーンのベルト。

そういうわけでわたしは今、このオフィスに座っている。マンハッタンの夜空に浮かぶ、十月の澄んだ月明かりを浴びながら。目の前に愛用のノートパソコンを広げて、だれかの運命をかえるべく待ち構えている。寂しさのあまり心に開いた穴を埋めて、心はずむ楽しいデートの場へと誘うべく。孤独の淵から連れ戻し、送り出してあげるのだ、身も心も癒される腕の中へ、つまり、その……あとはご想像にお任せする。

それに、そうして幸せを配って回っているうちに、わたしのエタニティ・メイトもみつけられるかもしれないし。

もちろん、それを期待しているわけではない――こと男性に関しては、ファッション

などよりはるかにこだわりがある。だからとりあえず今は、滞りなく支払いができればよしとするつもりだ。なかんずく、ビザ・カードから請求される途方もない額の支払いが。それこそが、この最新の事業――時代を先どりした事業に、資金をすべてつぎこんでしまったわたしの行く手に立ちはだかるものだから。

けれど、べつに心配はしていない。地元紙という地元紙に広告を載せたとたん、オフィスには入会希望者が殺到するはず（高級デパートの半額セールに押しかける人数ぐらいは）。お金もどんどん入ってくるし、そうすれば、すごすごとコネチカットの実家に戻らなくてもいい。もうこれ以上、我慢して日曜のディナーに付き合うこともない。そもそも、夫候補のヴァンプが同席しているディナーなど、耐えられない。いい忘れていたけれど、母には悪い癖があり、やたらとわたしに見合いをさせたがるのだ。いくら寂しくないといっても、まるで聞く耳を持ってくれない。

いずれにせよ、〈ＤＥＤ〉は願ってもない会社になるはず。となると、次の大きな問題は、いかに経済的に自立し、自己実現するか。というより、さしあたってまず、来月の家賃の支払いを何とかしなければ。

パートナー紹介業は、とにもかくにも刺激的だ。

2

パートナー紹介業は、とにもかくにもお金がかかる。

紹介そのものに、ではない、念のため。〈DED〉を起ち上げてまる二週間。けれどそのあいだ、一件も紹介していなかった。結果、次第に、紹介という仕事そのものが、新たにわたしを責め立てはじめてくれていた。

イーヴィ（黒のカプリパンツに白のミニTシャツ、それにピンクのラインストーンバングルをふたつ）が机に置いていってくれた請求書の山を見つめる。そのとなりには、クライアントのファイルがある。二冊だけ。

わかっている。九千五百七十万人も独身者がいるのに（そのうち七十五％は人間で、ヴァンプは十％、残り十五％はそれ以外）、どうにかこうにか勧誘できたのは、わずかにふたり（ドゥ）だけ。

ぐっとつばを飲みこみ、突然胃に穴が開いたような感じを無視する。こういうときは、無視するに限る。ことに、わたしのような正真正銘の楽観主義者にはそれが一番。人生には山あり谷あり。そのたびに慌てふためいてたら、気が遠くなるほどの長い時間を生きるなど、とてもできない。とり乱したり、ヒステリックになったりするのは、大問題が起こってからでいい。

「オフィスを開いて一カ月してからでないと、月々の支払い請求書って来ないと思ってたのに」イーヴィにぼやいた。

「それは、新しい配線設備の請求書です。電気と電話を引いて、インターネットをつないだじゃないですか――要するに、ごく普通の請求書ですよ」そして、さらなる山を手わたされる。「で、これが、その月々の請求書です」

そう、つまり大問題が起こったわけだ。けれど、とりあえず頑張って笑顔をつくってみる。「今日は電話あった?」嫌なことに直面したら、必死にいいことを考えて、バランスをとるのが何より。

「二件だけです。最初はミセス・ウィルヘルムから」このルイーザ・ウィルヘルムが、クライアント・ファイル第一号。彼女は未亡人――エタニティ・メイトは十年ほど前に、パラシュート降下の着地の際、オークの鋭い枝先に少々近づきすぎてしまったのだ。ついでにいうと、ルイーザは母の親友でもある。「エスコートしてくれる相手はみつかっ

たかって」

「だけど、ルイーザがうちと契約したのって夕べでしょ」

「わたしもそういったんですけど、夜会は三週間後なんだからって返されました」〝夜会〟というのは、年に一度真夜中に開かれる、盛大な舞踏会とチャリティーオークションのことで、主催は〈コネチカット・レディースハンター・クラブ〉。母はその副会長をしている。さらに、三回に一回の割合で、クラブ後の食事会も仕切り、よく冷えたAB型マイナスの血を満たしたグラスを配りつつ、わたし(ファ)のこともあれこれ話して回ってくれていた。曰く、娘は聡明だ。美しい。立派な一人前だ。そして、とにもかくにも文句だらけの生き方を、文句のつけようがないものにするために、とにもかくにもエタニティ・メイトをみつけなければならないと。

話がそれてしまった。夜会に戻そう。

この夜会は、上流階級ヴァンプにとって、とても大事な行事だった。

「一刻も早くみつけてくれっていわれたんですけど」イーヴィが言葉をつづける。「いざとなれば、去年みたいにマーヴィン・テリボーンが声をかけてくるのを待つこともできるそうなんです。でも、ミセス・ウィルヘルムとしては、早く相手をみつけてもらって、マーヴィンに目にものを見せて、嫉妬させたいらしいですよ」イーヴィにまっすぐ見つめられる。「明日までに何とかしてほしいそうです」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com